

# 東北支援報告に400人が感動



報告会の初めに亡くなった方々へ黙禱

## 9人、切々と体験を語る

グループ わ の東北支援報告会はジョイラックデーの10月22日、カレッジホールで開かれ、400人を超すカレッジ生・OBが熱心に聞き入りました。

報告会は10時開会。松島秀明カレッジ事務局長が「 わ による東北支援活動は阪神大震災のお返しの意味があり、時宜にかなった活動だ」と挨拶。西田圭一・わ理事長は、3月からの支援活動を説明したあと、「今後も息長く続けるつもりだ。皆様のご協力をぜひお願いしたい」と呼びかけました。次いで、第1次支援チームの活躍を収めたビデオ『震災ボランティア奮闘』を上映。

続いて道満俊徳氏（1・2次団長）による軽妙な司会で、大澤氏を皮切りに9人が体験発表。胸のうちに溜めこんだ思いを、声を詰まらせながら訴える内容に、会場はシーンと静まりかえりハンカチで目頭を押さえる女性も見られました。ある男性も「とても感動した。ご苦労様とねぎらいたい」と話していました。KSC仲間による話は、より身近で、心の琴線に触れるものがあったのでしょうか。会場アンケートでも「ビデオも報告も大変よかった。皆さんの努力に頭が下がる。できれば自分も参加したい」との回答が多数ありました。ロビーでは、東北支援活動の写真や わ の活動を紹介するパネルが並べられ、多くの人が足を止めていました。生環3年のグループが震災時の危機管理を訴える展示をしたり、振興協会が東北の物産を販売したり、「東北デー」の一日となりました。

### 【9人の発表内容】

大澤貞男（生13、1・2次、昔遊び）=被災地の子

供たちは昔遊びで喜んでくれるだろうか、が一番心配だった。でも童謡を歌い、南京玉すだれでびっくりさせ、ぶんぶんゴマを一緒にやるころには、硬かった子供たちの表情もすっかりリラックス。帰りには窓から手を振って別れを惜しんでくれた。「こんなに子供たちが笑ったのは久しぶり」と保母さんからも感謝された。神戸の子供たちからのメッセージも喜んでもらえた。被災した子供たちは、一見、元気そうだが友だちや肉親を亡くし、心に深い傷を負っている。心のケアを続けてあげることが必要だ。

### 「夜になると外へ出て泣くんだ」

内村ナナ子（国18、1・2次、田んぼ）=夏の田んぼ作業では東北を肌で感じたが、2次では「心」で感じてきた。ある仮設住宅でのこと。小3の男の子が自転車で案内してくれたが、その子がぼつともらした。「ばあちゃんと父さんが流された。この間、焼いたんだ...」と。そこへ、おばあさんの手がかりを求め警察へ行ってきたという81歳のおじいさんが帰宅。「体育館も仮設も泣く場所がない。夜になるとさびしいので、外へ出て泣くんだ。でも頑張るよ」。目が不自由という76歳のおばあさんからも「夜が怖い。ほんとにさみしいよ」としみじみ訴えられた。

片岡隆夫（国17、1次、田んぼ）=大震災の直後、現地へ連絡をとったが個人ボランティアは受け入れてくれなかった。その後、長野で地震があり、そちらへ行って帰って来たら、 わ の募集があった。登米市の知人は、車に乗っていて津波に遭遇。山に逃げ込んで一夜を過ごした。娘と妻も無事だったが、以後避難所で生活しているという。田んぼ作業は千人が亡くなった南三陸。昼食を摂った旧家の庭でタバコを吸っている男性と話した。父親と母親が依然不明で「昼にはここへ泣きに来てるんや」。グシャグシャの顔で訴えられ、返す言葉もなかった。